DOR-0030

LIVE! NEW HERD 76/45

DAM

A-1 **アイアンサイドのテーマ** 作曲/クインシー・ジョーンズ QUINCY JONES 編曲/山木幸三郎

A2&B **至上の愛** 作曲/ジョン・コルトレーン JOHN. COLTRANE 編曲/山木幸三郎

「LIVE！NEW HERD 76cm/45rpm」制作にあたって

この4月30日、三鷹市公会堂で第7回ＤＡＭ録音会を行ないました。参加頂いたお客様も二百数十名を越える大盛況で、出演の"宮間利之とニューハード"も乗りに乗った演奏でした。会場の雰囲気も最高調に盛り上がって、熱気あふれる演奏を録音したお客様も満足して頂けた事と思います。この記念すべき録音会に、ニュ　ハードという日本を代表するビッグバンドを招き、かねてから私たちＤＡＭの念願であった、生演奏の録音からレコード化までを一貫して行なう、ＤＡＭオリジナル録音盤の第一弾としてこのレコードが完成し、ここに皆様にご披露出来る事を大変うれしく思います。

今回の録音に当りましては、日本に数台しかないという録音車を配置して、ＭＣＩの76cm16チャンネルデッキによる高速マルチチャンネルライブ録音を行ないました。全9曲90分の熱演の中から、演奏、曲目、オーディオ的面白さから"アイアンサイド""至上の愛〔4部作〕"の2曲を選定し、さる5月7日及び12日に東芝ＥＭＩの第2スタジオでトラックダウン。5月10日及び13日に川口工場でカッティングを行ない、レコードの完成が6月の初めという、類をみない超特急製作になりましたが、その出来上がりは、ライブ録音ながらシャープで立ち上がりの良い音と、更に"至上の愛"の「賛美」のブラスの力強い圧倒的音圧など、スタジオ録音をしのぐ迫力があり、レコードの限界に挑戦し、ＤＡＭオリジナル・オーディオ・チェック・レコードとしてふさわしいものに完成致しました。ぜひ皆様のオーディオ装置のチェック用として活用して頂ければ幸いです。

なおこのレコ　ド化は、関係者各位の御協力によるもので、紙面をかりて御礼申し上げます。今後とも、このような企画を実施して行きたいと思いますので、ご期待下さい。

ＤＡＭ　推進委員会

第7回ＤＡＭ生録音会を見学して

このレコードは第7回ＤＡＭ生録音会に於いて、生録音とは別のマイクセッティングにより、76cm/secの16ch　で同時に録音され、レコード化されたものである。その上、76cm/sec　2chマスタ　から45回転でカッティングというのも嬉しい限りである。

レコーディング・データ等については、エンジ＿アの堀氏に譲ることにして、ここでは現場に参加できなかった人の為に当日の雰囲気をお伝えしたいと思う。

私は第一家庭電器が、4月30日に三鷹市公会堂に於いて、宮間利之とニュ　ハードのライブ・レコーディングが行なわれると連絡を受けた。ニューハードといえば、74年のモンタレイ・ジャズ祭、75年のニュ　ポート・ジャズ祭という世界の桧舞台で絶讃され、レコーディングにコンサートにと意欲的に活躍している。フルバンドのライブ・レコーディングとは珍らしいなと思い、当日の午後2時頃に三鷹駅に着き、タクシーを待っていた。すると私の後から2人の若者がテープデッキを重そうに持って歩いて来た。（この時はまだ生録音会と同時のレコーディングとは知らなかったので、「あんなに重い機材を持ち歩いて熱心なオーディオ・ファンがいるものだ」と思っていたのだが）タクシーに乗り会場に着き階段を登りながら、ふと上を見上げると、私より後にタクシーに乗ったはずの2人が先にいるではないか。きっと彼等の生録にかける熱意が早く公会堂に着かせたのではないかと思う。

会場に入り、客席の最後列から下を見下して、まずびっくり。というのは、250 台余りのテープデッキが整然と並び、本番の始まるのを今や遅しと待ちかまえている。今さらながらに生録音ファンの人々の熱心さに感心するばかりである。

舞台はというと、送り出し用、レコ　ディング用合わせて50本近くの、録音マニアにとっては一度は使ってみたい様なノイマンやエレクトロボイス等のプロ用マイクが立ち並び、交通渋滞の為に到着が遅れているニューハードのメンバーを待っていた。

この隙にレコーディングの方の模様を見ておこうと思い、舞台の袖に入って見たが、録音機材及びスタッフの姿がどこにも見当たらない。一体どこで録音するのかと思っていると、搬入口の外に、スタジオ並みの機材を積み込んだTAMCOの大型トラックがあった。舞台の様子はテレビカメラでモニターするという大がかりなものである。

そうするうちに、ニューハードのトラックが到着し、メンバーも続々と会場入りして来た。これだけ開始が遅れても参加者の誰一人として不平を言わずに黙々として準備を進めているあたりは、好感が持てる所である。そして約40分程遅れてリハーサルが、その曲はエリントンナンバーとして馴染深いTake The"A" Train と映画「追憶」の主題曲The way we were　の2曲を軽く10分位音出しをして、その後、各パートごとに音を出しレベル設定を行なった。

そして本番開始迄の間にラインの送り出しにあたったTEAC　の二宮氏から、最後の細い注意があり、生録参加者の為のレベル合わせを行ないスタンバイ。あとは演奏開始を待つばかり。

いよいよ本番、二宮氏のスタートの合図を待って、参加者は若干緊張した面持ちである。待ちに待ったスタートの合図で250 台のデッキが一斉に回り出す。この時のスイッチングの音がまたすごい迫力である。

この日の演奏曲目は、第1部が、コルトレーンの曲ばかりで、"IMPRESSIONS""GIANT STEPS"　そして山木幸三郎の書き下しでコルトレーンの代表作"A LOVE SUPREME（至上の愛）"のPart Ⅰ～Ⅳ。

第2部は馴染の深い曲が多く、ニューハードの得意とする曲もかなりあった。まずリハの時のTake The"A"Train、The way we were、Tonight、テレビ主題曲のIronside, Night and Day, PERDIDO,　そしてニュ　ハードのTHEMEでしめくくった。

以上の曲の内、今回レコード化されたものは、アイアンサイドと至上の愛の全パートであるが、アイアンサイドはテレビ映画"鬼警部アイアンサイド"のテーマ曲として良く知られている他、あまり関係ないが、土曜の夜の"何とかエンダ　"という番組のナレーションの入る前にもイントロの部分が使われているので馴染のある曲である。

お馴染のイントロの後、ワウワウを使ったギターのリズムが入り、ソプラノ〔鈴木〕、トランペット〔岸〕、トロンボーン〔塩村〕と8ビートのリズムに乗った軽快なソロが続き再びテーマに戻り終る。この曲ではベ　ス〔福島〕がエレクトリック・ベースに持ち替えている。またこの日はギターの山木幸三郎がいつものフルアコースティックのギターでなく、ソリッドモデルのギターを使用しているのが印象に残った。

さて問題の大作"至上の愛"であるが、パートⅠからパートⅣまで合計20分以上にもなる、意欲的な作品である。全パートを通して、原曲のイメージを残しながらも、ニューハードらしくまとめ上げた山木のアレンジはさすがである。途中パートⅢの終りで、拍手が入るのもライブらしくおもしろい所である。

以上音楽は音を聴いて楽しむものであり、活字で見るものではないと常々思っているので、簡単な説明にとどめておくが、後は充分にこの素晴しい演奏を楽しんで頂きたい。

それから、生録音会の為にスタジオ録音の様に充分なモニタ　ができないというハンディがありながらも、これだけの好演奏をしてくれたニュ　ハードのメンバーと、この様な企画でオーディオファンのみならず、ジャズファンをも楽しませてくれた第一家庭電器のスタッフの皆様に拍手喝采。

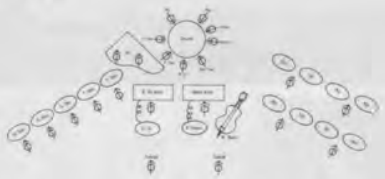
小林　貢

ニューハード・ライブ録音に立ち合って

おなじみとなったＤＡＭ生録会は、今回で7回目を数えました。今回の大きな特長は、ステレオ・2チャンネル・マスター・レコーディング〔生録会〕と、16チャンネル・レコーディングを同時に行なった事です。

■レコーディング・ノート

- 日時：昭和52年4月30日〔土〕
- 場所：三鷹市公会堂ホール
- 出演バンド：宮間利之とニュ　ハード
- バンド配置図



- マイクアレンジ

①	E. Bass	(LINE)	自社製LINE OUT用AMP使用	
②	E. Bass	(MIC)	U-87	〔ノイマン〕
③	W. Bass	(LINE)	プレイヤー使用のLINE OUT用AMP使用	
④	W. Bass	(MIC)	C-55p	〔ＳＯＮＹ〕
⑤	Bass Dr.		RE-20	〔Ｅ.ボイス〕
⑥	F TOM		RE-20	〔Ｅ.ボイス〕
⑦	F TOM		RE-20	〔Ｅ.ボイス〕
⑧	TOM TOM		SM56	〔シュアー〕
⑨	Snare		SM56	〔シュアー〕
⑩	Hi-Hat		C-55p	〔ＳＯＮＹ〕
⑪	Top		C-451	〔ＡＫＧ〕
⑫	Top		C-451	〔ＡＫＧ〕
⑬	Pf Hi		U-87	〔ノイマン〕
⑭	Pf Low		U-87	〔ノイマン〕
⑮	EG		U-87	〔ノイマン〕
⑯	B sax		U-87	〔ノイマン〕
⑰	A. Sax		U-87	〔ノイマン〕
⑱	A. Sax		U-87	〔ノイマン〕
⑲	T. Sax		U-87	〔ノイマン〕
⑳	T. Sax		U-87	〔ノイマン〕
㉑	Solo用		M-269C	〔ノイマン〕
㉒	Solo用		M-269C	〔ノイマン〕
㉓	Tp		M-269C	〔ＳＯＮＹ〕
㉔	Tp		C-38B	〔ＳＯＮＹ〕
㉕	Tb		C-38B	〔ＳＯＮＹ〕
㉖	Tb		C-38B	〔ＳＯＮＹ〕

●使用録音機材

タムコ録音中継車〔2号車〕
ミキシング・コンソール：ＭＣＩ　28インプット/16アウト
録音テープレコーダ：ＭＣＩ　16チャンネル　一
スピーカ　：ＪＢＬ-4320
アンプ：ダイナコ　ＳＴ-400Ａ
ガイド用テープレコーダ：Ampex AG-440(2チャンネル)

今回のレコーディングは、前記の状況からコンサートを録音するライブ・レコーディングの形体とまったく等しい方法をとりました。〔注.拍手用の場内MIC　は立てていません〕

お気付きの様に通常のビッグ・バンドの並びと少々変えて、Saxを左側にし、Tp、Tb　のかぶりを少なくしました。

ライブ・レコーディングは、後処理等の問題で、かぶりをなるべくすくなくする努力が必要です。但しライブ・レコーディングの雰囲気をだす為、わざとかぶった音を取るときもあります。

ここで「かぶり」という言葉がでてきましたが、簡単に説明しておきます。たとえばApf の音をとるのにpf用のMICをセットしますが、このpf用のMICにpfの 音だけではなく、他の強音楽器〔たとえばDr's. とかE. Bass〕の音がとびこんでくることです。

まず、バンドの編成、配置が決まると、それに対していかにその楽器に合った音を取るかというマイク・アレンジにかかります。今回のマイク・アレンジは前記の通りです。

Bassは、ElecとWood があり、曲によって使いわけられ、音は両方ともLINE録りとMICとのMIX　によって録りました。

DrumsのSN、Tom Tom、F Tom. BDr　にダイナミック・マイクを使用し、その他はすべてコンデンサー・マイクを使用しております。

次に、セッティングしたMIC〔26本〕をMIXING するわけですが、レコードの最終仕上げの想定に基づき、各楽器を16チャンネルトラックにふりわけます。

トラック別セレクト表は下記のように決定しました。

	INSTRUMENTS IN TRAKS							
至上の愛	1 W. Bass LINE	2 W. Bass MIC	3 BDr	4 Top Kit	5	6 SN	7 Pf	8
	9 EGt	10 B. Sax	11 A. Sax	12 T. Sax	13 Solo	14 Solo	15 Tp	16 Tb
アイアンサイド	1 E. Bass LINE	2 E. Bass MIC	3 BDr	4 Tp Kit	5	6 SN	7 Pf	8
	9 EGt	10 B. Sax	11 A. Sax	12 T. Sax	13 Solo	14 Solo	15 Tp	16 Tb

なお、収録テープ・レコーダ　はすでに30インチ〔76cm/sec〕に調整され、本番の音出しを待っている。

■トラック・ダウン・ノート

日時：昭和52年5月7日／5月12日
トラック・ダウン場所：東芝ＥＭＩ第2スタジオ
トラック・ダウン・コンソール：ＭＣＩ　24インプット／16アウト
トラック・ダウン・テレコ：ＭＣＩ　16チャンネル〔サーボ付〕
マスター・テレコ．A-80 STUDER MKⅡ
ＡＧ440〔サーボ付〕AMPEX
エコー装置：ＡＫＧ　BX-20E　EMT 140

トラック・ダウンは前記用項の機材で行った。

トラック・ダウンに入る前にレコ　ディング時にガイド用として2チャンネル録音〔モ＾ター・バランスOUT　〕しておいたテープを聞いて、レコードプレスする曲目①アイアンサイド②至上の愛を選出した。

このアルバムはコンサート形式をライブ・レコーディングしたレコードですから、スタジオ録音とはまた違ったフィーリングを伝えてくれるものと確信します。充分にお楽しみ下さい。

レコーディングミキサー　〔堀　憲一〕

DAM ライ

上・会場風景

左・タムコ中継車

MCI

下・ミキシング・コンソール

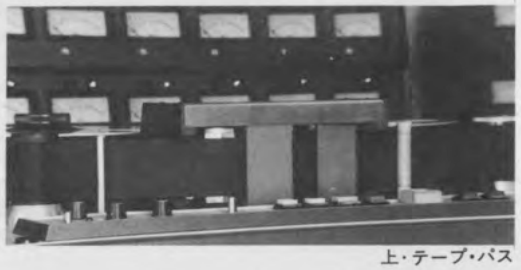
左・テープ・デッキ
MCI 16チャンネル

上・タムコ中継車内にて
ミキサー：堀

上・タムコ中継車内部

右・テープ・デッキ

下・テープ・ヘッド



上・テープ・パス

イヴ・レコードが出来るまで……

●マイク・セッティング

①フェ　ズ・チェック
②録音中継車――ステージ間の連絡電話
③Pf　ノイマンU-87×2　高域、低域
④EGt　ノイマンU-87、and　ライン録音
⑤ソロ用マイク　ノイマンM-269C
⑥ドラムセット

Top	L. AKG C-451E
	R. AKG C-451E
Hi Hatt	ソニーC-55P
SN	シュアーSM-56
Tom①	シュアーSM-56
Tom②	シュアーSM-56
Tom③	シュアーSM-56
B. Tom	エレクトロボイスRE-20
⑦ B. Dr	エレクトロボイスRE-20

⑧⑤と同様
※Tp　ソニーC-38B×2　Tbソニー C-38B×2
※Sax　ノイマンU-87
※Bass　ノイマンU-87and ライン録り

●トラック・ダウン

近頃マルチトラック録音という言葉を良く聞かれると思います。皆さんはすでに御存じの事と思いますが一般に8トラック以上のテープレコーダーで録音する事をマルチトラック録音と呼んでいます。このマルチトラックに録音されたものをミックスして普通のステレオ、モノラル等にする作業をトラックダウン又はミックスダウンと言っています。

さて今回はその内16トラックテープレコーダーを用いたライブ録音のトラックダウンについて感じた事をお話ししましょう。

現在スタジオ録音で最も多いのは16トラック録音ですが、ライブ録音においても16トラック録音が良く用いられます。ライブの場合は（公演の回数にもよりますが）本番は一回しかありませんので後に処理しやすいよう、又その時の雰囲気を失なわないよう録音することが重要です。ライブ録音は多数のマイクロホンを同時に使用しているので例えば一つの楽器の為に立てたマイクに他の楽器の音が入ってくる事があります。これをカブリと言っていますが、カブリが多いとその楽器の生音との間に位相差を生じてしまうので全体を出した時音が少し濁ってしまいます。このカブリを最少限にすることも録音テクニックの一つですが、ライブ録音ではやむを得ないことです。しかし音の濁りを少しでも少なくする為、ノイズゲートと言う機械を使用してお互いのカブリを少し取る事が出来ます。この事によりシャープな音創りに必要なイコライザーを容易に使えるようになり、ライブ録音においてもかなり明瞭度の高い音とライブ独特の雰囲気をもった音とがプラスされたものが出来るようになります。これは一例ですがこの他にも色々なテクニックを使ってトラックダウンは行われ、種々の音楽が完成するのです。

東芝ＥＭＩ株式会社
音響技術部　蜂屋量夫

●カッティングからプレスまで

1　カッティング
テープに録音・編集された音楽がカッティング・マシンによりラッカー盤にきざみ込まれます。

3　ラッカーマスターからマスター
ラッカーマスターは電気の不良導体なので銀鏡処理をし、次に電気メッキでその上に更に0.3㎜程度のニッケル層を作りこれをラッカーマスターから剥しマスターを作ります。

2　原盤メッキ
カッティングされたラッカー音盤は、メッキ工程を施されて原盤が製造されます。

4　プレス
原盤をプレス機にとりつけ、予熱された材料を加熱、加圧、冷却することによりレコードが成型されます。

★ 宮間利之とニューハード　パーソナル・ネーム

宮間利之

リーダー	宮間　利之	トロンボーン	上高　政通	テナーサックス	貫田　重夫
トランペット	武田　和三	トロンボーン	塩村　　宰	バリトンサックス	多田　賢一
トランペット	岸　　義和	トロンボーン	福嶋　照夫	ピアノ	鷹野　　潔
トランペット	山口耕二郎	アルトサックス	鈴木　孝二	ベース	福島　　靖
トランペット	神森　　茂	テナーサックス	森　　守	ドラム	中村　吉夫
トロンボーン	片岡　輝彦	アルトサックス	白井　淳夫	ギター・編曲	山木幸三郎

鈴木孝二

貫田重夫

福島　靖

後列左から　岸　義和／武田和三／山口耕二郎／神森　茂
前列左端　上高政通

森　守

多田賢一

中村吉夫

白井淳夫

鷹野　潔

山木幸三郎

左から　片岡輝彦／塩村　宰／福嶋照夫

Tape Recorder	Studer A-80vu/II（カッティング仕様）
Drive Amplipfier	Neumann SAL-74
Cutting Lathe	Neumann VMS-70
Cutter Head	Neumann SX-74

CUTTING MASTER TAPE 76cm/sec

このレコ　ドは、カッティングレベルが一般のレコードにくらべて、大巾に高くなっておりますので、カートリッジ・アームの調節が悪いと歪や針とびを起すことがありますので、御注意下さい。
レコ　ド材質ープロユース材料使用

RECORDING ENGINEER　堀　憲一
アシスタント　田中照雄
黒田大明
関口倫正
高橋嘉夫

MIXER　蜂屋量夫
CUTTING ENGINEER　岡崎好雄